



米八の田んぼでスマート農業の技術を視察する各国・機関の代表(5月12日、G20新潟農業大臣会合現地視察)

田植えから収穫まで 営農情報を一元管理

昨年度、本市で実施された「スマート農業 企業間連携実証プロジェクト」(有)米八の田んぼはその実証農場として選ばれました。このプロジェクトは民間企業が持つ革新的な技術を水稲栽培に活用するもの。ICTを搭載した「スマート農機」などを使い、そこから得られた作業量・内容などの営農情報を一元管理し、省力化や低コスト化を図ることが目的です。機器からの情報は営農支援システム「アグリノート」へ自動的に送られ、日々蓄積されていきます。

「プロジェクト参加前は、ICTによって農作業がどのように変わるのかイメージが湧かなかった」と語る加藤社長。ところが、スマート農機を使っている中で、これまで経験を基に行っていた農作業などが、ICTの活用により大きく変わっていくことを実感したそうです。

作業負担の軽減、 生産コスト削減に

実証実験では直進補助機能付きの可変施肥田植機(土壤センサーで肥料の量を自動調節できる田植機)などが使われました。「GPS(人工衛星)を利用して現在位置を把握するシステム)により自動で直進するので、田植機の運転に慣れていない人でも安心して操縦できる」と加藤社長は言います。自動的に必要な量の肥料をまいてくれるため余分な肥料を削減できたほか、土壌の養分が均一になり稲が倒れにくくなったことで収穫作業の時間短縮やコメの品質向上につながるなど、一定の成果が出ました。



有限会社 米八 (南区味方)
代表取締役 加藤 誉士寛 社長

新潟の農業×情報通信技術

本市で行っている情報通信技術(ICT)活用によるスマート農業の実現に向けた取り組みを紹介します。
☎ニューフードバレー特区課(☎025-226-1864)

新潟発 農業を支援する ICTベンチャー企業

営農支援システム「アグリノート」を開発したのは、2010年に創業し本市に本社を置くウォーターセル(株)です。アグリノートはスマートフォンなどの携帯端末に導入して使うアプリケーションソフト。航空写真で農地の位置を確認できるほか、田んぼごとに作業内容や生育状況などを記録することができ、さらにスマート農機などと連携させると、機器から送られてくる作業データが自動的に記録され、入力する手間が省けます。「営農情報をアグリノートに集約することで、コスト・品質・収穫量を田んぼ1枚単位で、見える化でき、農業経営に役立てられる」と話す長井社長。現在は、出荷後の流通情報を取り込めるようにするなど、さらなる機能強化に向けて開発を進めているそうです。

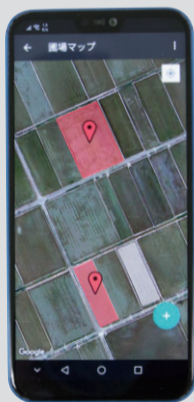
ICTの活用で 農業を変える

アグリノートは農業の課題である「農家の高齢化による後継者不足」の解決にも役立てられるのだと話す長井社長。「アグリノートに蓄積されたデータを活用すると、これまで長年の経験と勘に頼ってきた『肥料が必要か』『いつ刈り取りをするか』といった判断を経験が浅い人でもできるようになります。これにより、若い人も農業にどんどん参入するようになってほしい」と期待を寄せています。

長井社長はICTの活用が稼げる農業への鍵であると続けます。「これからの農業は農地の集約・大規模化が進んでいくと思います。そこにICTをうまく活用することで、経営の効率化を図ることができます。アグリノートを通して、稼げる農業の実現に貢献していきたい」と意気込みを語ってくれました。



ウォーターセル 株式会社
(中央区笹口2)
代表取締役 長井 啓友 社長



アグリノート
地図情報や航空写真を取り込んでいるため、自分の農地を視覚的に管理できるのが特徴